
クレシェンド・パワー

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレシエンド・パワー

【Nコード】

N1854S

【作者名】

日野五十鈴

【あらすじ】

吉良シンジは2学期の間だけ、田舎の中学で過ごす転校生。校内合唱コンクールをきっかけに、少年は“やりたいこと”を見つけていく…。スポーツもラブもないけれど、学校行事を舞台に展開されるベタな青春ストーリー。

【12話完結シリーズ第8段!!】

クレシェンド・パワー（１）

担任教諭は黒板にデカデカと、白いチョークで『吉良信』と書いた。

「^{キラ}吉良は両親の仕事の都合で転校してきたが、本校には冬休みまで
しかいられない。仲良くしてやってくれ」

中１男子にしては小柄で童顔の転校生は軽く一礼する。

市立宇田川中学校。

校舎とグラウンドの周りを、ぐるりと田圃が囲う田舎校。

その１階に位置する１年Ａ組。

ここが転校生の９月からの新しいクラスだ。

「吉良、お前の席、窓際が一番後ろな」

「はい」

担任教諭の指示に素直に従い、転校生はその小さい身体には不釣り
合いと思われる、白いシヨルダーバッグを落書きの残る机の上に置
いた。

「おい」

席に着くと、隣からモノサシで肩を突つつかれる。

開襟シャツの第1ボタンを外した男子生徒が、モノサシを右手に人のよさそうな笑みを浮かべていた。

「俺、HR委員の諸星^{モロボシ}。よろしくな」

「あ、ハイこちらこそ」

こうして、早くも新しい友達その1ができたのだった。

そしてもうひとり…。

あれからなんとなく急接近した転校生・吉良信^{シンジ}とHR委員長・諸星^{アキ}旭^ラは、登下校を共にするまでになっていた。

他愛のない世間話に弾んでいると。

「…って、うお!? シンジ、前ッ!」

「えっ？ わっ…！？」

ドンッ。

「っ！」

まだ緑色の残るイチヨウの樹が立つ曲がり角で、誰かと正面衝突してしまった。

互いに撥ね飛ばされて尻餅をつく。臀部に痛みが走ると同時に、ガシャーン！ と不吉な音がその場に響いた。

「…いまどきそんなベタな展開って…おいおい何やってんだよシンジ」

「すっ、すす、すみませんっ！」

アスファルトにぶちまけられたパレットやら絵の具やらを、自己責任で拾っていく。

面相筆に手を伸ばすと、それを拾おうとした相手の手に触れてしまう。驚いて顔をあげれば、ぶつかったのは自分より少し年上らしい少女だった。

黙秘を貫くわけにもいかなくて、シンジは苦笑しながら訊いてみた。

「…あの…えっと…もしかして、絵とか描いてるん…ですか？」

少女はにっこり笑って頷いた。

…だけだった。

「？ 喋るの、苦手？」

シンジの失礼な質問にも嫌な顔ひとつせず、少女はスケッチブックに何事かを書き付けた。サラサラと軽快にペンを走らせる音がする。

『小さい頃、交通事故で喋れなくなっただんだ』

「！…あ…ごめんなさい…」

では、彼女は失声症なのだ。

別のページに書かれた次の言葉を、アキラが受け取り棒読みする。

「ん？ 『キミたち美少年だね。今度モデルやらない？』…って」

お世辞かよ。

「あつ、じゃあ名前、教えてよ。こっちはおれの友達で、諸星アキラ。そんでおれ、吉良。吉良シンジ」

サラサラサラ。

『ウキタ・ユウリ』

宇喜多悠里 16 歳。 自称さすらいのイラストレーターです』

書かれた文字を目で追って、シンジは二度目の苦笑をもらす。

「…宇宙に喜びの多い悠久の里…か。 すごい名前だね」

…こうして、新しい友達その 2 もできた。

クレシェンド・パワー（2）

市立宇田川中学校。

転校前に通っていた中学とは違って、田圃と林に囲まれた田舎校。

この学校にもすっかり馴染んできたシンジだったが、意外にも今日、初めてこの学校で音楽の授業を受ける。

「シンジ」

「んっ？ なに？」

生真面目に、かつコソコソとアキラは言った。

「音楽は甘く見るんじゃないぞ」

.....。

.....。

.....。

「はい？？」

その言葉の意味を知るのに、そうそう時間はかからなかった。

「つつつ、自由曲まだ決めてないってどーゆーことよッ!」

ばんっ!! と手近の机を叩き、ジロリと生徒たちを睨みつけた。
まだ30代半ばくらいの教師だけに、そのバイタリティーのせいか
怒ると一層すごみがある。

全学年共通音楽担当教諭、アマミ・ヒカルコ 天見光子。

一部の教員にさえ“鬼”と恐れられる強者である。

(…お…音楽の先生こんなに怖いなんて…聞いてないよぉ…)

アキラは気の毒すぎてシンジをまともに見返すことができない。

音楽担当教諭というからには、芸術を愛する心と、歌ってストレス
発散しているというイメージから、もっとおおらかな人物像を思い

浮かべていた。というかシンジの固定観念がそうだった。

でも、実像は鬼教師。

「あら？ 貴方もしかして、今度転校してきたって子？」

天見の視線がシンジに向けられた。獲物を狙う肉食獣の目だ。

「え？ あ、ハイそうであります！」

つい軍隊言葉になってしまう。それを意に介した様子もなく、天見は鬼の形相をクールビューティーに変えて質問を重ねた。

「そう。…貴方、何か楽器はできる？」

「？ はいピアノなら…すごい簡単なやつ…」

すごい簡単なの「ん」まで言い終えたとき、シンジは天見の視線が如実に語っていることに気がついた。

…弾いてみる、と。

「いつ、いやでもおれホント簡単なやつしか弾けなくてデスね」

「関係ないわ」

華麗にスルーされた。

後でこっそりアキラに訊いてみたところ、なんでもこれは一種の通過儀礼であり、生徒の音楽センスによって今後の教育方針を決めて

いるらしい。なんとも風変わりではあるが。

逆らうにはあまりにも恐ろしすぎたため、シンジはやむを得ずピアノの椅子に腰掛ける。クラスメートと天見の視線（後者のがイタイ）を小さめの一身に受けて、最初の鍵盤をポーンと押した。

最初の音は、ミ。

曲目は黒鍵練習曲でお馴染みの。

「…ね…！？」

「『猫ふんじやつた』…？」

天見は呆れ果てて何も言えなかった。

演奏が終わって「お粗末さまでしたー」とシンジが言えば、爆笑とお世辞ばかりの拍手に混じって「いいぞーピアノニストー」「それしか弾けねーのかー」と野次がとぶ。しかし。

ただひとり、天見だけは、静かな眼差しでシンジを見つめていた…。

クレシェンド・パワー（3）

「なあシンジ」

「んー？」

夕暮れ時のコンビニ。成長期真っ盛りの中高生が、買い食いをするために寄り道する場所と時間帯。

もちろんそれは、シンジとアキラにとっても例外ではなかった。ド田舎とはいえ国道に出れば、一応コンビニのひとつくらいある。

「シンジ？」

「んー」

シンジはアキラに生返事しながら、サ。デーとマ。ジンを同時に立ち読みしていた。

「今日の音楽」

「ん？」

「のときの呼び出し」

「んー」

「…呼び出しの内容ってなん」

「んーんー」

「……。…呼び出されて何を」

「ん」

「人の話を聞けッ！！」

ガンッ！ とアキラはシンジの頭をジャ。プの背表紙で殴る。反対の手には商品棚からチョイスしたとおぼしき菓子類を握っていた。

「いたー！ なにすんのさー！ それよか何その柿ピーとかスルメとか酢昆布とか。若年寄は舌までオヤヂかよ！？」

「テメエが2冊同時読みして俺の話に集中してねーからだろが！
つか若年寄って何だよ！？ 若年寄って！」

「見た目も中身も実年齢以上に爺臭いのを“若年寄”ってんだよ」

「んだとゴルアー！！ 爺臭いってのは俺のことかーっ！？」

そのままケンカに持ち込みそうになったが、レジからの冷たい視線にハッとなる。2人はそのまま問題を棚上げした。

「…で？ 音楽のときの呼び出し、何だって？」

気を取り直してアキラは訊く。音楽の授業の後、シンジひとりだけ

天見に呼び出されたのだ。

「んー？　なんかね、ふざけるなってさ」

「…何を」

隠す必要もないので、今度はガ。ガンに目を落としながら答える。

「えっと…本当はもっと高度な曲も弾けるだろうに、なんで『猫ふんじやった』なんだ。ふざけるんじゃない！　だって」

……………。

しばしの沈黙。

「シンジお前、マジでピアノ弾けんの！？」

「一応」

ちなみにシンジの得意曲はショパン。間違っても初心者が1日2日でマスターできる代物ではない。

「じゃーなんで『猫ふんじやった』なんだよ！？」

「や、だって先生が簡単なでもいいって言うからさ。それに結構みんなウケてたじゃん」

あれはウケてたと言えるのだろうか。

「…じゃ、じゃあさ」

テレビCMでお馴染みの黒い炭酸飲料を手にとって。

「11月に合唱コンクールあるだろ？ お前、伴奏やらな…」

「やだ」

即答。

「…それはどのような理由で？」

「やりたくはない。…それだけ」

会計を済ませてコンビニを出るまで、2人の間に会話はなかった。

イチヨウの葉はどれも見事な黄金色に染まっていた。

数日後。

合唱コンクールの自由曲がやっとのことで決まり、指揮者と伴奏者は次のLHRで決めることになったのだが。

「吉良、ちよつと」

呼ばれた気がして廊下側を振り向けば。

（！？ あ、天見センセ…！）

後ろ側の出入り口で“鬼”が手招きしている、幸か不幸か、これから1時間の長い昼休みだ。

…まずい、逃げなければ！

近寄って言い訳を試みるも。

「ああああの！ 実はおれ、昼休みバタバタしてまして。べ、弁当食う時間もないくらいでして！ だから、そのっ」

「15分だけでいいわ。ちよつとツラ貸しなさい」

逆らうだけの勇気がなかった。

「……。……。…ハイ…」

クレシェンド・パワー（4）

「今度は真面目に弾いてね」

「いや、でも」

「弾・い・て・ね？」

「……。…ハイ…」

またしても強制的にピアノの椅子に座らされ、シンジは心の中でしくしくと泣き濡れていた。

逃げ出すことはそりや可能だったが、この音楽教師に意見を申そうものなら十中八九、命はないことを知っている（メンタル面で）。

チラリと横目で様子をうかがえば、獲物を狙う肉食獣の目とぶつかった。

（…うう、見てる。バッチリ見てる…）

絶対零度の凍りつく視線に耐えながら、最初の黒鍵を2ヶ所、押す。

シンジの十八番、ショパンの『夜想曲』だ。

「……………」

「……………」

…洗練優美、舟歌風の滑らかな旋律。多少装飾されてはいるが深刻さはなく、優雅さを失わずして身近な感情を表演する。

「……………」

「……………」

短いリミットの都合上、CMや映画のワンシーンなんかで使われたりする数小節だけを抜粋した。弾き終わった余韻の中、天見は素直に称賛の眼差しを送った。納得したように頷いてから。

「やっぱりね。思った通りだわ」

「けど、なんでおれがピアノ弾けるって分かったんですか？」

そんなもの、という態度で天見は言う。

「あのとき『猫ふんじやった』をミから弾き始めたでしょ？ アレは普通レのシャープから始めるものよ。わざわざ半音ずらして弾くなんて芸当、もう弾き慣れてしまった人くらいしかやらないわ」

さすがと言うべきか、ダテに音楽教師を長くはやっていない。その絶対音感と観察眼に舌を巻いていると。

「それでね、吉良」

背筋の凍る迫力の声楽系ボイス。

「今度の校内合唱コンクール、伴奏やってみる気、ない？」

「！」

…合唱コンクール。ピアノ伴奏。

シンジの存在感のある濃褐色の目が、微かに揺らいだ。…気がした。

「吉良？」

シンジは少し迷った風情を見せたが、すぐに音楽室のピアノの黒い蓋を閉じた。

「ありません。それに、伴奏者はもう野々村^{ノノムラ}で決まりだって。…噂ですけど」

天見はシンジの口から出てきた名前にクツと目を見開く。

野々村雅輝^{マサキ}。

その男子生徒は確かに宇田川中一年生の間で、というよりは全学年の間でも一番、ピアノがウマイということでは知られていた。

噂によれば彼はクラシックの名曲から、最新ヒット歌謡の弾き語りまで難なくこなすという。そこで全校生徒につけられたアダ名が『ピアノリスト』。その才は天見も認めるほど。しかし。

「あなたも、レベル的には野々村と大差ないわよ？」

シンジは若干まだ幼さの残る顔に大人びた笑みを浮かべた。

「でも、やる気しないんで。…失礼します」

防音扉の閉まる音が、天見しかない音楽室に虚しく響く。

誰もが同じことを言う。

アキラも、天見先生も、両親の不在中世話になつてゐる祖父母でさえも。

…なんでみんな、おれに伴奏やれなんて言うんだよ！

クレシェンド・パワー（5）

「ふうん。じゃあお前、ピアノ嫌いなんだ」

季節はとつくに衣替えの時期に入っていた。それでも冬服の詰襟に袖を通すと少し汗ばむ陽気が続いている。

「えっ、なんで」

だって、とアキラはシンジを見下ろした。互いに成長期ではあるが身長差は縮まらず、依然として比較的長身の部類に入るアキラの方が小柄なシンジよりも背が高い。

「どうしてもやりたくないんだろ？ 合唱コンクールの伴奏者」

「そついうワケじゃ…」

アキラは決して大きくはない目に怪訝な色を見せる。

「だっておかしいぜ？ ピアノ弾けんのにそのコト隠してたり、はては伴奏やりたくないなんて言い出してよ。フツーだったらもっとこっ、さ…」

アキラの言わんとすることが分かっているから、シンジはあえて何も言えなかった。アキラはシンジの名誉欲の無さに半ば呆れているのだ。

…決して、そういうことではないのだけど…。

「……………」

「……………」

しばらくお互いに黙ったまま、黄金色に染まる田圃に挟まれた道を歩いて。

「……、だってさ」

ふと、シンジは不意に足を止めた。

「おれ転校生なんだよ？ よく知らないヤツが伴奏者やりたいなんて言って、それでクラスのみんなが良い顔すると思う？ ましてやA組にはピアニスト呼ばわりされてる野々村だっているし」

風が稲穂を揺らして金色の波を作る。

「嫌なワケじゃないよ。ないけど、おれ、…野々村を抜く自信はない」

田圃の風が2人の間を駆け抜けていった。

…その直後だった。

「怖いんだな」

思いがけないアキラの声に、シンジは細い眉を寄せる。

「は？」

「俺にはただお前がさー、クラスのみんなに反対されんの、怖がってるようにしか見えないんだけど？」

アキラの、変声期を終えたばかりの声には侮りの色が濃い。それをモロに感じて、シンジは無意識のうちにショルダーバッグのベルトを握りしめた。

「…おれは…」

白いベルトを握る手に力が入る。気付けば思わずといった風に吐き捨てていた。

「くそっ、お前なんか、おれの気持ちが分かってたまるかよ！
なにも知らないくせに！！」

最後の「に」まで言い切ったところで、今度はアキラが拳を握る。

「ッ、ああそうだよ分からねえさ。俺は転校したこともないし、ピ
アノも弾けない。お前の気持ちなんか皆目見当つかねえよ。…けど
な」

送られてくる視線にはいつものような柔和な色が見えない。

「俺だつてなあ分かりたくもねえんだよ！ 自分のやりたいことす
ら満足にできねーヤツのことなんかなッ！！」

「……………っ」

何か言葉を用意する前に、シンジの中の何かがプツンと、キレた。

「…そうかよ…分かった。じゃあなっ！」

「！ シンジ！！」

振り向きもせずに、シンジは駆け出す。標準より少し小さめの背中が遠ざかっていくのを、アキラはただ見送ることしかできなかった。

シンジの後ろ姿が見えなくなったとき。

どこから飛んできたのか、さっきまでシンジの立っていた場所にイチョウが一枚、ひらりと落ちてきた。

クレシェンド・パワー（6）

一体どこまで走ったのだろう。

シンジは見知らぬ公園の前で足を止めていた。

「…こんな場所があったんだ…」

公園といっても大層なものではない。広葉樹でぐるりと囲まれた内側に、ペンキの禿げたブランコと滑り台があるだけ。黄金色に葉を染めきったイチヨウの木の下には、青いベンチが備え付けられ…青いベンチ？

（あれ？）

よくよく眺めて気が付いた。見覚えのある、まだ中高生くらいの女の子が座っている。自分より少し高い背丈、小さな背中。肩口で切り揃えられた細い髪。横に置かれた画材と、…スケッチブック。

…そうだ、彼女はたしか。

「宇喜多」

ポツリと名前を呼ばれ、自称さすらいのイラストレーター・宇喜多悠里は、ゆっくり振り向いてから年下の友人を見てにっこり笑った。

「…宇喜多はさ、なんで絵、描こうと思ったの？」

公園近くの自販機で買った缶コーヒー（ユーリのおごり）を開けながら、シンジは訊いた。公園の風景をスケッチしていたページを捲り、ユーリは答えをサラサラと書いていく。

『やりたかったことだから』

シンジは無意識のうちにドキツとした。

『わたし、筆談生活長かったでしょ？ だから絵とか描く機会も多くて。それにこれ半分バイトみたいなものなんだ。学校は夜に行つてね』

定時制なのかー。

『信くんは？ 何かやりたいことないの？』

「えっ!？」

核心を突かれて一瞬言葉に迷った。

「…うん、あるよ。あるけど…」

ユーリはその細い首を少しだけ傾ける。

「なんとなく…やる気がしなくてさ」

缶コーヒーを握る手に自然と力が入った。

「正直言つて、それが本当にやりたいことなのか分からないんだ。やってみたい気持ちはあるんだけど、切っ掛けが掴めない。本当にしてもいいのか、後悔しないか、って感じになっちゃって…」

隣で何かを書いている気配がする。

「やりたくても…できないん、だよな。……宇喜多？」

隣で突然ユーリが立ち上がったと思えば、じつとこちらを見つめてくる。それでも過去に声を喪ってしまった少女は何も言わずに、画材を手にとって立ち去ってしまった。

「あ、ちよつと宇喜多…！」

自分もほとんど勢いで腰を浮かせる。未だ声さえ知らぬ女友達は、公園の入り口から数メートル先の曲がり角に消えた。

(……………)

しばらく呆然と立ち尽くしてから、ユーリの座っていたところに何

かが置いてあることに気が付いた。スケッチブックから1枚だけ切り離された紙だ。

「!.....」

そこには殴り書きで簡素な文が染め抜かれていた。

『今やりたいことやらないで、いつやるつもりなの!?!』

その晩、シンジはなかなか寝付くことができなかった。

思考を空にする度に思い出す。小学生のときにピアノを弾いて、皆に称賛されたこと。中学に入ったら、それが皮肉や嫌味にすり変わったこと。

そして今日のアキラの言葉と、ユーリの置き手紙。

『俺だつてなあ分かりたくもねえんだよ! 自分のやりたいことすら満足にできねーヤツのことなんかなッ!-!』

『今やりたいことやらないで、いつやるつもりなの!?!』

(…おれは…)

あのと看、何をするべきだっただろう。

クレシェンド・パワー（7）

瞼の向こうは白い闇で眩しく塗り潰され、スズメか何かの囀る声
が耳に入り、それが段々とクリアになっていく。

「……っ……？」

昨日なかなか寝付けなかったわりには、妙に早い時間にポツカリと
目を覚ましてしまった。

2学期の間しか宇田川中にいることのないシンジは、部活動には入
っていない。朝練中だろう、白いジャージ姿のキマってる運動部員
がグラウンドでランニングするのを見ながら、シンジはスニーカーか
ら上履きに履き替える。

（…ちょっと早目に来すぎちゃったかな？）

珍しく誰ともすれ違わなかったので、シンジは一番乗りを確信しな
がら教室に入った。

（さすがにまだ誰も…、…！）

しかし、そこにはすでに先客がいた。

「アキラ」

ガラスと開いたドアの音で、誰かが入ってきたことに気付いた先客はシンジに目を留める。

窓の下にある腰の丈ほどしかないロッカーに体重を預けたまま、アキラは気まずそうに視線をそらした。

「うつす…その…シンジ、昨日は悪かった…な」

カーツと頬に朱がさしていくのを感じた。アキラを見れば彼も耳まで赤くなっている。

「…いいよ、もう…おれこそ、ゴメン」

そう言い交わしたものの、会話がそれ以上続いてくれない。朝早すぎたのが裏目に出た。2人きりの教室はしんと寂しいくらいに静まり返っている。

（やべ、間がもたない）

シンジは意味もなく窓際の花に水をやり、アキラはアキラで意味もなく黒板消しに付いたチョークの粉を落とすという、さながら一昔前の優等生みたいなことをしてその場をしのいでいた。

が、あまりにもテキパキやりすぎたせいか、無言を徹してるうちに予想以上の速さで作業が終了してしまう。

「……………」

「……………」

ついに万策尽きて、隣同士にある自分の席に座ることになってしまった。しばらくよそよそしい空気が流れる中、ついにアキラはそちらを振り向きもせず話を持ちかける。

「そういえば、シンジ」

「ん？」

「C組、自由曲『想い出』のヤツに変えたらしいぜ。…あの曲はピアノ伴奏でポイント取られるからなあ…」

顔を見合わせることなく紡がれた言葉に、シンジは鼓動を少し乱した。

チラリとアキラの様子を窺うが、カバンの中身を整理している彼に振り返る様子はない。

…言おうか、言わないでおこうか、ギリギリまで迷って。

「あ、あのさアキラ」

「ん？」

…昨日一晩中考えて、ようやく決心がついた。

『俺だつてなあ分かりたくもねえんだよ！ 自分のやりたいことから満足にできねーヤツのことなんかなッ！…』

『今やりたいことやらないで、いつやるつもりなの！？』

幼さの残る顔に無邪気な笑顔を浮かべながら。

「立候補するよ、おれ。合唱コンクールのピアノ伴奏」

「……………！」

意外な返事だったのか、いつも冷静で落ち着きのあるアキラが、珍しいことに驚いたような表情を見せた。

しかしすぐにその、決して大きくはない目を、さらに細めて、…そして。

「…そっか…」

そして、笑った。

クレシェンド・パワー（8）

2度目のLHR。

「…ってことで指揮者は俺・諸星旭に決まりましたー」

いいぞー委員長ー、という冷やかに「うるせっ！」と反論。

「では次に伴奏者…誰か立候補する人いませんかー？」

現状としては、真剣に前を向いて耳を傾けている者が数人、隣近所とワイワイ無駄話に夢中になっている者が多数。

…その中で。

「…あの、おっ、おれ…やってみます！」

そのか細い声に反応したのは、アキラたちHR委員を含んだごく少数だ。

「はいはい。吉良、立候補と。…えーっと、他には誰か？」

委員長の声に反応する生徒は誰もいない。黙っているかペチャクチャおしゃべりしてるかのどちらかだ。

賛成でもなく、反対でもなく、ただし反応がないのは異議がないの

と同意に受け取られる。

もちろん他者を推薦することも可能なのだが、推薦された候補者が
おらず立候補者がいる場合は、無条件に立候補した者が優先される
仕組みになっていた。

「……えー、では伴奏者は吉良に決定ということで」

書記は黒板に書かれた『諸星旭』と『吉良信』の名前だけを残して、
白いチョークで書かれた文字を消した……。……。

……。

……。

……。

「……ええー？ 伴奏者って野々じゃねーのかよ！？」

「マジで！？ ……あー、マジだわ」

彼らの席は廊下側の前方。当然その会話は窓際が一番後ろに座って
いるシンジには届いていない。

「なんでイ。ピアノも弾けないのにバンソーやりたいってエの？」

「野々さー、なんで立候補しなかったわけー？」

マサキの席は廊下側の前から2番目。その隣の女子生徒がそう不満そうに話しかける。

感情の読めない目で素っ気ない眼差しを女子生徒に向けると、マサキは頬杖をつきながら黒板を眺め、やっぱり素っ気ない返事を返す。

「立候補もなにも、オレ最初から伴奏者やる気なんてなかったし」

「…野々お…」

女子生徒はガックリと肩を落として机上に突っ伏した。

…こうして、シンジは1年A組伴奏者ということになったのだが…。

「なんつで吉良が伴奏者なわけえ？ 野々が伴奏やれば勝てるかもしれないのにさあ」

「ホント！ 勝てないと思うとヤル気失せるよねえ…もーやだ」

放課後の教室には彼女たち2人だけだ。

「だいたい吉良のヤツ、ちょっと調子乗りすぎてると思わない？
ほら、アイツ転校生だからさー、最初の方とか結構チヤホヤされて
たじゃん」

「あーそれ言えてるかも」

あーあ、と嘆きながら女子生徒は固い椅子の背もたれに寄りかかった。

「なあーんかアタシ、合唱コンクールやりたくないなーあ」

…シンジが伴奏者になったのが面白くないらしく、彼女らをはじめ
として、早朝や放課後の練習をサボるクラスメートが日ごとに増えて
いった。

……………。

……………。

……………。

「！ あっ」

「…どうしたの？ 吉良、昨日はそこできてたじゃない」

シンジの世話になってる祖父母の家にはピアノがない。ので、シン
ジは毎日放課後に音楽室のピアノを借りて練習していた。

失敗したのは一番盛り上がる場所…ピアノ伴奏では一番の聴かせ
ところになる、その直前である。

「何か悩み事？」

「……。いえ、べつに……」

自分が和を乱した、とは、とても言えない。

クレシェンド・パワー（9）

シンジとクラスメートとの間に生じた亀裂は、また練習をサボる者と真面目に参加する者との間にも、小さなヒビを加えていた。

「…あのさー、前から言おうと思ってたんだけど」

先日、放課後の教室でくだをまいていた女子生徒が、同じパートの女子生徒に「直してほしいところがある」と言ってきた。

シンジの伴奏に賛成するわけではないが、真面目に朝と放課後の練習に参加していた生徒だ。

「アンタの入るところ、他の子と違って早いんだよねー。ちょっとは合わせてくれないとさあ」

後ろに控えていた他の女子生徒たちも一斉に頷く。しかし彼女は楽譜を取り出すとその問題の箇所を指差した。

「でも、楽譜どおりに歌えば確かにこのタイミングで…」

「楽譜なんて読めないし、そんなの知らないもん」

彼女は絶句する。女子生徒たちの間からクスクスと忍び笑いがもれる。

…そして、彼女も朝と放課後の練習から姿を消した。

こうした事態が男女問わずクラスメートの間に多発し、いつしか各パートで2〜3人も集まらず、自主連はやらない方向に定まっていた。

アキラやマサキがクラスメートの説得に乗り出したが、その甲斐は全くと言っていいほどなく、…気付いたときにはリハーサルさえも終わっていた。

そのデキは言うまでもなく、というやつで、1年A組の生徒全員が天見の呼び出しをくらった。

「なんなの、今日のデキの悪さ。本番まであと3日しかないのよ？
アンタたち、分かってんの？」

鬼教師のハスキーなお説教は、淡々と喋っているだけに余計コワイ。

しかし当の生徒はじつと俯いたり、大胆にも睨み返したり、はては「自分には関係ありません」と言わんばかりに上の空だったりと、

反応は千差万別だ。

共通して言えるのは誰ひとり言葉を発しないこと。それが余計に音楽教師の怒りを煽った。天見はとうとうキレ気味に叫ぶ。

「ッ、何か言いなさいよ！ アンタたち、優勝したくないの！？」

それでも動く者はいない。…そこに。

「……。…もう」

ポツリと、聞こえた。

「もう、みんなやめろよ…」

声のした方に全員が振り向く。

マサキが俯きながら肩を震わせていた。

「もういいかげん、吉良を認めてやれよ」

「…野々…？」

「…っ！ 伴奏者がどうこう言う以前に、みんながまとまってなきや意味ねーじゃんかよおッ！…」

「…！……………」

マサキの、感情の読めない目からひとしずく、ぽとりと落ちる。

(…そっか…野々村も責任、感じてたんだ…)

ベタすぎるほどベタな展開になったね、と照れ隠しのために話をふろつと隣を見れば、アキラは壮絶な貰い泣きをしていた…。

マサキのこの叫びは天見の説教よりも効いて、クラスメート全員を突き動かした。

それから彼らは改心したように練習に練習を重ね、

ついに本番！

クレシエンド・パワー(10)

「気合い入れていくぞーっ！」

「おお——ッ! !」

HR委員長アキラの音頭で円陣を組み、一同は会場へと向かう。

教室を出る前に、シンジは机の上に置いておいた紙……ゆるく巻かれた画用紙の一枚を手にとると、そつと白いシヨルダーバッグの中にした。

つんつんと肩を突っつかれたのは、校門をくぐってすぐだった。

『宇喜多！』

朝早いのに寝癖もムクミもなく、ユーリはただ穏やかに微笑んでいる。

『なんでここに？ 弟とか妹とかいたっけ』

スケッチブックには『地域の人も自由に見に来れるんだよ』。

それとは別に無造作に丸められた画用紙を手渡され、半ば反射的にそれを広げて読んでみた。しかもさりげなく可愛いイラスト付きた。

【がんばれピアニスト！】

そう書かれていたのは、誰かから聞いて知ったのだろう。

『…あ、ありがとう…』

顔を赤らめて言えばユーリは声なく笑う。

そして画オセットを肩にかけ、スケッチブックを脇に抱えたまま、ユーリは一旦校門の外へと走っていった。

《つづきまして、1年A組のみなさん。おねがいします》

そのアナウンスに促され、一同はステージへとあがる。

客席に一礼したアキラが壇にあがってタクトを振り上げれば、3パート2列は一斉に合唱の体勢をとった。

白と黒の鍵盤に指をかけたシンジとアイコンタクトを交わし、軽く2拍振られたタクトが降ろされると同時に4和音が響く。

…途端、審査員のひとりがゾクリと肩を震わせた。

旋律に乗って混声3部合唱が重なっていく…。

夏が過ぎ 風あざみ

誰のあこがれにさまよう

青空に残された

私の心は夏模様

主旋律がソプラノから男声にチェンジする。

フェードアウトした余韻の中、場面が切り替わるようにしてパツと現れた、メッツ・フォルテでの4和音。

夏まつり 宵かがり

胸のたかなりにあわせて

八月は夢花火

私の心は夏模様

間奏に入り、ピアノ伴奏の聴かせ所に入る。

左手一本での2和音をベースに、右手で演奏するふんだんに使われた16分音符と臨時記号。その全てをシンジは、小さな手と細い指で見事弾きこなした。

夏が過ぎ 風あざみ

誰のあこがれにさまよう

八月は夢花火

私の心は夏模様

そして、静かなハミングと丁寧なピアノ演奏に打たれたフェルマータ。

…発表は拍手を呼び起こすには充分だった。

休憩を挟みながら3学年全クラスが歌い終え、審査発表。

《講評。まずはじめに1学年の部…》

賞は最優秀賞と、各学年ごとに用意された優秀賞がある。しかし最優秀賞は3年生がとることになるので、結果として1、2学年が狙うのはただひとつ、優秀賞のみだった。

1学年全員が息を呑む中で。

《優秀賞は…、……………》

…直後、一部の列から歓喜の声があがった。

クレシェンド・パワー（10）（後書き）

使用曲【少年時代】

作詞：井上陽水

作曲：井上陽水・平井夏美

編曲：岡部栄彦・大熊崇子

クレシェンド・パワー（11）

どこか爽やかな余韻が冷めぬまま、学校は冬休みに突入する。

「今まで一緒に勉強してきた吉良が、本日をもって転校になった」

窓の外にあるイチョウは寒々しく枝を晒している。

役目を終えたかのようにひっそりと置いてあるラジカセを、黒板の前に立ったシンジはチラリと見た。

教室のラジカセが最後に働いたのは、今から1ヶ月ほど前だ。

《優秀賞は…、…1年C組です》

「！」

1学年最後列がわつと歓喜の声をあげる。

最前列からの4列、1年A組とB組は落胆を隠しきれない様子だった。女子など涙を流し、逆にチラホラと笑いを漏らす者もいる。

列の都合上、隣同士になったアキラとマサキが苦笑しあっているのが見えた。最前列の左端でポツンとひとりぼっちのシンジは、視線をさ迷わせているうちに、ふと隣の男子生徒と目を合わせてしまった。

…キラ、オマエノセイデ…。

無意識のうちに吹っ掛けられる言葉を覚悟する。

「…あ、あのさ」

「惜しかったな、もうちょっとだったのになあ」

その吹っ切れたような表情と声色に嘘が見えないから、シンジは用意していた言葉さえ言えなくなってしまった。

…彼らの合唱コンクールは、終わったのだ。

そして、シンジは今日を最後に宇田川中を後にする。

校舎とグラウンドを囲む裸の田圃にも、どこか淋しげで冷たい風が吹くようになっていた。

「ほい、これ。クラス全員から」

「えっ？」

クラス代表としてアキラから手渡されたそれは、一言メッセージが放射状に並ぶ寄せ書きの色紙だった。

ライトグリーンやピンクやオレンジ、色とりどりのペンで華やかに

アキラのも、マサキのも、シンジの伴奏に反対していた生徒たちのも見られる。

『またな隠れピアニスト！（笑）』

『こんど会ったら何か弾いてね』

『夢はでっかく！ これからもガンバレ！』

「…向こうに行ってもさ」

アキラの細めた目とシンジのぱっちりした目がかち合って。

「忘れんなよ？ 俺たちのこと」

「……………うんっ……………」

もう少しで泣きそうになった。

商店街から流れてくるクリスマスソングが聞こえる中、シンジは世話になった祖父母に別れを告げて、父親の運転する車に乗り込んだ。

後部座席から窓越しに外を見ると、常緑の木々が青信号の点滅のように現れては消えた。

（宇喜多…あれから会ってないな）

せめてサヨナラくらい言っておきたかったのだが。

そう思っていたときだった。

「！？」と、とめてっ！」

丁字路での無理矢理な急ブレーキ。

後部座席から急いで降りると。

「宇喜多！」

ヒッチハイクよろしく胸元に持ち上げられたスケッチブックには、
『見送り行けなくてゴメンね』とある。

「ゴメンねも何も、宇喜多は昨日の夜学校のあと徹夜で…」

みなまで言い終える前にユーリは、あの日と同じようにゆるく巻いた画用紙をシンジに手渡した。開けてみて、と仕草で言われ、シンジはそれをおもむろに開く。

「！」

合唱コンクールでのシンジの一場面がスケッチされていた。

「…いつの間に」

照れ隠しのためか、はたまた別れが辛いからか。ユーリは精一杯の笑顔を向けてから、シンジにお礼と別れの言葉を言う暇も与えずに、クリスマスソングの聞こえる街へと駆け出した。

けれど遠ざかる小さい背中から。

『忘れないでね…』

喪われたはずの声が聞こえた気がした。

終

クレシェンド・パワー（11）（後書き）

次回は特別番外編です♪

クレシェンド・パワー（番外編）

放課後に流れてくるピアノの音を辿れば、音楽室に足を運んでいた。防音扉の開く音にも気付かず鍵盤とにらめっこしている女子生徒に、彼は昔の自分を重ねて思わず苦笑を漏らす。

「…こんなところで何してるのかな？」

呼び掛ければ、女子生徒は指を止めてビクッと身体をちぢこませた。夕陽に赤く染まった音楽室、隣にはいつの間にか優しげな微笑みを浮かべた音楽教師がいる。

「…あ…先生…」

呟かれた声に彼は、細い眉の下にあるパツチリした目を和ませた。

「ちょっと代わってもらえる？」

女子生徒が譲ると「ありがとう」と礼を述べ、椅子に腰かけて高さを調整する。

そして鍵盤に指をかけると、さっきまで女子生徒が練習していた曲を奏で始める。

「あ…」

「まずは左手だけ、見なくても弾けるよう練習しようか。テーマさえ掴めれば、あとはトリルとかこなせばいいだけだからさ」

音楽教師は鍵盤も楽譜も見ずに弾きながら、そう話し掛けてくる。

「すごい…！ 手元も見ないで弾きこなすなんて」

「いや…どつちかというところの場合見なきゃできない方が問題だと思うよ？」

グサツ！ と音楽教師は無邪気な笑顔で核心を突いてきた。

「…おっしゃるとおりです…」

「ピアノの上手下手なんて、結局は慣れと要領で決まるものだからさ」

「そう、ですよね…」

納得したような言葉を呟くも、女子生徒は激しく落ち込んでる。

それを察したのか、音楽教師は演奏をやめ、思い切り腕を伸ばして座ったまま女子生徒の頭に手を置いた。

「ははっ、そんなに落ち込まないでよ。だーいじょぶだって！ 慣れるまでの時間なんて、単に人それぞれってだけの話だから」

「そう…信じたいです」

「そそ。前向きに前向きに」

そしてのせた手を頭にポンポンする。

これじゃまるで子供扱いじゃないかとムツとなったが、音楽教師の無垢な笑顔に毒気を抜かれて反論できなかった。アンタの今の顔のが数倍子供っぽいよ音楽教師！

「まあアレだね。こーゆーのは楽しんでやったもん勝ちだと先生は思う」

「そういう、ものですか？」

「好きこそものの上手なれ、って云うでしょ？」

「先生、音楽好きなんですね」

「え？」

「あ、いきなりすみません！　なんだか楽しそうに話すものですか」

「…まあ、ね。ずっとこればかりやってきたから…と言うか、これ以外できないし」

そつと、ピアノの蓋を撫でる横顔は、優しい。

「先生がキミと同じ歳くらいの時かな、友達におんなじこと言われたわけ」

「…なんて？」

「自分の本気でやりたいことくらい出来なくてどうする、って」

目を剥いた女子生徒に構わず音楽教師は続ける。

「それで火がついちゃって、合唱コンクールの伴奏やることになったんだけど。クラスにはリスペクトされてる子がいてね、その子を押し退けての立候補だから、クラスメートの反発も大きかった。練習もマトモにできなかったから、リハーサルなんかもうボロボロでね。でもその、リスペクトされてた子がかばってくれたから、ギリギリでなんとかなった」

「それで、合唱コンクール勝ったんですか？」

「負けたよ」

音楽教師は屈託なく笑う。

「他のクラスは初めから一致団結して、朝も放課後も練習に練習を重ねたんだ。それをつい1週間しか本気出せなかったクラスに負けたら、惨めでしょ？」

「それは…そうですね…」

「本気になってどこまでやるか、それによって結果は変わる」

ハッと見返してくる女子生徒に、音楽教師はまた子供のような笑みを向けた。

「本当にやりたいことなら、苦しいとか辛いとかそういうの抜きに本気で続けられるもんだよ？ だから」

音楽教師は立ち上がってまた頭をポンポンした。

「やらなかったときは、きっと後悔する。それだけのエネルギーを使わずにもて余しても、虚しいだけだからね」

頭から温かい手が離れる感触。女子生徒は防音扉に向かう音楽教師の背中に声を投げた。

「あのっ、また音楽室借りてもいいですか？」

上擦った声に苦笑しながら、音楽教師は立ち止まって女子生徒を見た。

「いいけど、ちゃんと許可はとってね」

教師は音楽室から出る。

夕焼けの差し込む廊下には、またあのピアノの音が流れていた。

了

クレシェンド・パワー（番外編）（後書き）

いろいろありがとうございました。

三（一）三

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1854s/>

クレシェンド・パワー

2011年5月12日16時17分発行